

『対月憶元九』 白居易

終生の親友元九

対月憶元九 白居易

月に対して元九を憶う

銀台金闕夕沈沈

銀台金闕夕沈沈

独宿相思在翰林

独り宿し相思うて翰林に在り

三五夜中新月色

三五夜中新月の色

二千里外故人心

二千里外故人の心

渚宮東面煙波冷

渚宮の東面煙波冷やかに

浴殿西頭鐘漏深

浴殿の西頭鐘漏深し

猶恐清光不同見

猶恐る清光の同じく見ざるを

江陵卑湿足秋陰

江陵は卑湿にして秋陰足る

【語句の意味】

元九

元稹「九」は排行

中唐の詩人・役人

37歳の時かん宦

官との争いが元で江陵の士曹参軍（交通や生活を

取り締まる地方官）に貶謫へんたくさせられた白居易の終

生の親友 白居易は29歳で進士に及第し秘書省の校書郎（書籍を管理する役）となった

この時すでに7歳年下の元稹が同じ職務に就いていた 二人の交友の始まりである

翰林 翰林院 天子の詔勅（しよくちよく）を起草する役所

故人 古くからの友人 ここでは元稹

渚宮 江陵にある宮殿 池の渚にある

【詩の意味】

宮中のあちこちに聳え立つ金銀の豪華な御殿や楼門もひっそりとして夜色に更けていく。私は一人、翰林院に宿直して君のことを思っている。

今宵は八月十五夜、出たばかりの明月に対して、二千里も遠くにいる旧友の心がしのばれる。

そちらの渚のほとりの宮殿の東側では、水上に煙る波が冷たく光っていることだろう。こちらでは宮中の浴殿の西側から時を告げる鐘や水時計の音が深々と聞こえてくる。

（私が君を偲んでいるように今宵は君も私のことを思い出してくれているだろう）それでもなお心配なのはこの清光を私と同じようには見られないのではないかということである。なぜなら君のいる江陵は低地で湿気も多く秋でも曇りがちの日が多いということだから。

【異説研究】

○銀台金闕

その① 銀台は翰林院の南側にあった銀台門で金闕も同じく西側にあった金鑾門（きんらんもん）を指す固有名詞。

その② 宮中の建物や門を単に豪華で美しいと飾っている普通名詞。

○新月

その① 出たばかりの月。ほとんどの解説書はこの説だが、

その② として（吉田喜久子氏）「白居易の別の詩から中天にかかった清新な輝きを持つ月と考えられる」がある。理由は一句目に「夕沈沈」とあり「夜が静かに更けていく」形容だから読者は夜の9時10時の世界に誘われる。ところが①説だと月の出が夜半近くになる。満月の出は日本でも中国でもいわゆる夕刻であるので整合しない。さてどちらがこの詩にふさわしいか。

○不同見

その①「同じく見ざる」と訓読する。その②「同じくは見ざる」と「は」を入れて訓読する。どちらも「私と同じようには見ない」と意解している。文法的には②は部分否定形の慣用訓読法なので「は」を入れたほうがこの詩には適っているが、採用している書は少

ない。

【備考】

この詩の本题は「八月十五夜 禁中独直 対月憶元九」だが本会では簡略にした。

【出典】「白氏文集」

【鑑賞】

くれぐれも健康には留意してくれ

この詩は810年、作者39歳の八月十五夜に宮中の翰林院に宿直して明月を眺めながら江陵に左遷されている七歳下の親友の元稹を憶つてつくったもの。

この詩の構成には他には見られない工夫がある。一句目は華やいだ長安宮殿群を表わして詩の導入としたが、二句目では一人ぼっちの作者が現れ、やや暗い心情が対句のようである。

三・四句は日本文学が多数引用しているが、やはり友人を思う心が簡潔な中にうまく表現されて人々を感動させるからであろう。それはそれとして、三句目は長安の作者が満月を眺めているが、四句目は遠い僻地に流され、苦労続きであろう親友との対比も、明暗に近い対意の表現を意図

したものか。五句目はまた江陵を空想し、六句目は都の宿直の夜の描写で自分の居所を紹介している。この都と江陵との輪番のような振り分けも対句に助けられて味わい深い。そして主題に移る。「親友の身の上を憶っている」でも妥当であるが、もう少し追求したい。岩波新書「新唐詩選続編」の115頁に吉川幸次郎氏の解説として「卑湿という言葉は、揚子江流域の土地の不健康さをいうものとして、古典に見える。この詩が江陵の氣候を卑湿と表現したのも、ただ今宵の月の光をくもらせるであろうという心配ばかりでなく、親友の健康に対する憂慮をふくんでいるであろう。」とあり、鑑賞が一段と深まる。やはりここは吉川幸次郎氏の言うように元稹の健康を案じているところまで鑑賞したい。元稹はかねてより頑丈な体でなく、53歳の若さで死んでしまう。この時は32歳であったが、あるいは彼の強い身体のことを勘づいていた作者が「健康にはくれぐれも留意せよ」といたわっているのであろう。

ただしこの詩は「唐詩選」には採用されていない。

【参考】

① 三・四句が引用されている日本文学としては新教本B2に記載済みであるが、ここでは「平家物語」の例を挙げ、あとは書名だけ列挙する。

「平家物語」 卷七せいさんのさた 青山之沙汰の段

村上天皇（950年ころ）が中国から渡来の名琵琶（名は玄象）を弾きなさる場面に「三五夜中新月白くさえ、涼風颯颯たりし夜なか半に、……」とある。ただし誰を偲んでいるのかは不明。

『和漢朗詠集』『源氏物語』『東関紀行』『源平盛衰記』『増鏡』『徒然草』『続千載和歌集』『三井寺』（謡曲）など多数。

② この詩に唱和した元稹の律詩

樂天の八月十五夜

禁中に独り直して

月を玩ぶを寄せらるるに酬ゆ 元稹

一年秋半月偏深
況就煙霄極賞心
金鳳台前波漾漾
玉鉤簾下影沈沈
宴移明処清蘭路
歌待新詞促翰林
何意枚臯正承詔
瞥然塵念到江陵

一年秋半ばにして 月偏へに深し

況んや煙める霄に就きて賞心を極むるをや

金鳳の台前には波漾漾たり

玉鉤の簾下には影沈沈たり

宴は明るき処に移りて蘭路を清くし

歌は新しき詞を待ちて翰林を促す

何ぞ意はん枚臯正に詔を承け

瞥然たる塵念江陵に到らんとは

（大意）

時は中秋、満月には深く感じるものがあります。まして靄の多い夜に景色を愛でる心が最高に高まる時はなおさらです。

私の住む鳳凰の飾りのある御殿の前には、おっしゃる通り池の波が広がり、つりさげられた簾の下からは月光が静かに射し込んでいます。

長安の都では月見の宴が月光の明るいうで開かれ、新しい歌の披露が翰林院に待たれていることでしょう。

それにしても、天子の御命令を承り、世俗を思うような平凡な私が江陵に送られようとは思ってもみませんでした。